

つて宮内大臣初め我々が是非にと勧めた結果である。

以上は仙石子爵の性格の一端に過ぎないが、是等の事だけを見ても、如何に子爵が名利に淡い公直廉潔の人格者であつたかゞ分るのであつて、天が若し此の上に若干の年を假すならば、將來は必ず貴族院に於ても重きを成したに違ひないと思はれるのであるが、比較的多病で、其の爲に早く薨せられたのは、遺憾に堪へない事である。

故ステewart君との辱交

本會理事
文學博士

加藤 玄 智

本會の終身會員であつたステewart君の事に就ては、既に林會長のお言葉があつたが、故人とは特殊の個人的關係があつた私として一言哀悼の辭を述べたい。諺に「縁は異なるもの」と言ふが、我々兩人間の相識關係が恰もそれに當つてゐる。私は大正十三年に關係學校から差遣されて約半年程歐羅巴に行つてゐたが、歸途はアメリカ經由の管であつたのを圖らずもスエズ通過で歸つた。其の船中で初めてステewart君に遭つたのである。そして船中生活約四十日の間にスツガリ親しくなつて、其の時恰も携へてゐた假印刷の英文古語拾遺を一緒に修訂し、それが縁で爾後死に到る迄親交を續けたのみならず、本會の爲にも種々盡力して貰つた。例へば本會紀要には毎卷必ず歐文で、其の卷の收載論文要旨を掲げる事にしてゐるが、あれは毎回ステewart君が必ず目を通して忠實に朱筆を入れて下さつたものである。そんなわ

けで、ステワート君は單に私一個の爲の良き友人であつたのみならず、本會の爲にも良友だつたのであるが、前申した通り、「縁は異なるもの」といふか、或は「袖摺合ふも他生の縁」といふか、私がアメリカ經由で歐洲から歸朝せず、偶々豫定に反してスエズ通過で歸つて來たからこそ此の典型的英國紳士と交友を結び合つたのであつて、若しも米國經由で歸つたならば、恐らく一生逢ふ由もなかつたのである。

私は其の旅の後に、從來僅に其原始的な姿だけしか知られてゐない神道の全容を外人に紹介することの必要を痛感し、英文神道即ち *A Study of Shinto* を書いて昭和元年に出版したが、これもやはりステワート君が仔細に目を通して種々の親切な批評を與へてくれたものである。私は今日之を故人の靈前に供へるにつけても追懷の止み難いものがあるのであるが、殊に感佩するのは、之れは本會の出版である爲め、本會から當時其の學勞に酬いるため、聊か謝禮として金百圓をステワート君に贈つた處が、故人は其中から僅に二十五圓だけを受納して呉れて、殘餘は總て本會に寄附された事である。固より故人は生活に事缺かぬ身分だつた點もあるが、此一事を以て見ても、故人が金錢慾に淡い、そして又、沒我奉公の精神に満ちた英國紳士の好典型であつた事が分ると思ふ。

殊に又面白いのは、既に會長の言葉にもある通り、君は自然科学者、殊に電信技師であつたが、其の他の事にも汎く趣味を持つてゐて、一個の素人天文學者であつたと共に、又、明瞭にして巧な英文を書く隠れたる名文家だつた。帝大名譽教授のチャンバレン氏とも、そんなわけで、死ぬ迄親交があつた。しかし名利に淡い君は、前申したやうに謝禮の金などを眼中に置かなかつたのみか、自分の名前を出して論文を公にすることを嫌つた。

大正十二年の震災の時に、君は横濱にゐたが、友人にメーソンと云ふ人（現在來朝中のメーソン氏とは別人）がゐて

それと毎回クラブで晝餐するのが當時の常例であつた。ところがあの震災の日に限つて、夫人（日本婦人）が蟲が知らずか引留めたので、ステワート君の友人メーソン氏だけがクラブへ行つて、食事中に家が潰れて壓死し、ステワート夫婦は奇蹟的に死を免れて神戸に移住した。令息は二人あるが目下、何れも英國で土木事業に従事しをられる。それを見舞ふために震災の翌年は一旦本國に歸つたが、再び日本へ引返して來る途中で、圖らずも私と同船し、前申した通り其れが機縁となつて、本會に不朽の功勞を遺されたのである。

會員として本會の爲に努力して下さつた人も多くあるが、君の如きは實に隠れたる功勞者であつて、其の點では恰も仙石子爵と其のタイプを同じうした。仙石子爵の人格の閃きに就ては既に關屋評議員が述べられたが、私も全く同感である。故子爵は表面冷淡な顔でゐながら、本會の事業には特殊の同情を持ち、心底から賛成して、實際に本會を動かす油であつた。本會の資金の事などにも常に留意して御世話下さつた。本會の今日あるを致したのも仙石子爵の御盡力に負ふ所が甚だ多いのである。私は、子爵といひ、ステワート君といひ、揃ひも揃つた没我奉公の人格者を、共に物故會員として、本日茲に弔意を表す事について無量の感慨を禁じ得ないのである。

以上二君の外に、私が私個人としてなほ深い感謝を獻げねばならぬ人にシルバン・レビ教授がある。これは立派な學者であつて、極めて博學である。私は明治三十一年東京帝大哲學科の三年生當時に其の講演を聽いて、佛教學者とのみ考へてゐたのであるが、日本佛敎を研究するには、日本民族精神の根柢たる神道を知らねばならぬといふ見地から、其の方面にも熱心な研究の手を伸ばされた。先年來朝された時私は自著英文神道を呈上した所が、それを讀んでから、同書の佛譯を思ひ立ち、日佛會館の若い佛蘭西人の學者に各章を分擔させて佛譯を始められ、主としてレビ夫人が其譯文

統一に當り、レビ教授の特別の盡力の結果、それが巴里のミューゼ・ギメ東洋博物館の叢書中の一冊として發行された。私は故人の徳を偲ぶ爲に、それも此處へ持つて來て靈前に供へたが、巻頭には君の序文があつて、「佛蘭西文で日本神道の事を書いた物には、既にマルタン神父の三冊本があるが、加藤博士はそれと全然異つた方向から、神道の正統を辿つて結論を出してゐる所に特色がある。これはマルタンと加藤博士と銘々の立場の違ふ所から發した事で、若しも其位置が交換されたならば、加藤博士は恐らくマルタンがカトリックの神父として神道に付いて書いたのと同様の事を基督教に就いて書いたであらう。私は茲に神道に就いての日本人の立場を知る上に必要と考へて加藤博士の本書を佛譯して世に紹介する」といふ意味が述べられてゐる。レビ教授が如何によく日本を了解した人であつたかは、此の序文でも知られると共に、レビ教授が、學問的宗教的偏見の無い人であつた事も亦十分に知られると思ふ。此の尊敬すべき學者を昨年末ステワート君と相前後して急に失つたのは實に残念な事である。茲に私は、昭和元年以來、本會の協賛會員として大なる盡力をされた上に、英文神道の佛譯までも刊行して呉れたレビ教授の死に對し、本學會としてのみならず私個人としても、深い哀悼の意を表することは、ステワート君に對する場合と少しも變らないのである。

昭和十一丙子年頭遺懷

酒井尊農居士

屠蘇一酌思農業

農業農民任務尊

農業養兵還養富

國防充實在農村

故ステワート君との辱交（加藤）